籠の中の月

四つ葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
籠の中の月

【Ｎコード】
Ｎ８６５５Ｋ

【作者名】
四つ葉

【あらすじ】
両親を事故で亡くした碧は、一流企業に勤める親戚の綾に預けられた。
碧の幼なじみの裕真は、碧への思いに気付いた。
太陽と月の物語

太陽のない朝（前書き）

ほのぼのとした話じゃないです。
誤字脱字が多いと思います。
よろしくお願いいたします。

太陽のない朝

「ほら、そろそろ起きなよ」
身長１８０センチくらいの背丈。黒髪で、知的そうな眼。
綺麗に整った顔をした男が、ベットに眠っていた少女に声をかけた。

少女は怯えた顔で男をみた。
「今日は出かける約束だろ？シャワーを浴びておいで」
優しい声で、少女にバスタオルを渡した。

少女は裸でベットに寝ていた。
少女は静かに立ち上がり、バスタオルを体に巻いて部屋を出ていった。

男は、キッチンで朝食の用意を始めた。
馴れた手つきで、次々と料理をしていく。
良い香りがしてきたところで、少女が可愛らしいワンピースを着て部屋に入ってきた。

「似合ってるよ。もうすぐ出来るから座っててて」男は、もう盛りつけに入っていた。

少女はソファに座り、小さく丸まっていた。
１５０センチくらいでとても華奢な身体。
ウェーブのかかった髪は色が抜け、茶髪のようだ。
小さな顔はとても可愛らしい。

男は、テーブルに料理を並べ終わり、少女に近づいた。
「こっちにおいで、冷める前に食べよう」

少女はソファから動かない。
男は少女の前に行き、顔をのぞき込んだ。
少女は、目を合わせようとしない。

男は、小さくため息をつき少女を抱き上げた。
「ヤダッ、さわんないで」
少女は抵抗したが、男は少女を椅子に座らせた。

「はい、いただきます」男は向かい合わせに座り、手を合わせた。

少女は料理に手をだそうとしない。
美味しそうな香りが広がっている。

「食べて。今日出かけるんだから、栄養とらないと」
男は手を止め少女の顔を見た。
少女は顔を下に向け男を見ようとしない。
「食べさせてあげないと食べれない？」
男は席を立とうとした。
その時、少女の目に涙が浮かんだ。

「何で泣くの？」
男は席に座り、少女の顔にふれた。
少女は男の手を静かにはらった。

「ほら、早く食べて」
男は笑って少女の頭を優しく撫でた。
少女は、目に涙をためたまま料理に手を出した。

b

男の名前は進藤綾（しんどうりょう）という。
一流企業に勤める２６歳だ。

少女の名前は桂城碧（かつらぎあお）といった。
公立高校に通う１６歳だった。

２人は親戚同士らしい。
碧の両親は、碧が高校に入る直前に亡くなった。
交通事故らしかった。
碧は高校生になってから、綾の家で暮らし始めた。
他に頼れる人がいなかった。

綾は、とても評判がいい人だ。
会社では、上司や同僚に信用され、後輩からも慕われているという。
友人も多く、女性からも人気があった。

碧は、人見知りをした。
人の中にいるのが苦手らしく、学校ではいつも一人でいた。
男子からは人気があるそうだ。

２人は昔から仲が良かった。
綾は碧を可愛がっていたらしい。
碧もとても懐いていた。

でも、その関係が崩れだしていた

籠の月

「ただいま」
玄関のドアが開き、綾が入ってきた。
現在の時刻は、午後９時。
綾は、リビングに鞄を置き上着を脱いだ。
そして、碧の部屋のドアを開けた。

碧は、机で本を読んでいた。
だが、綾が入ってきた瞬間に本を閉じた。

「ただいま、今日学校どうだった？」
綾は碧に近づいた。
碧は逃げるようにして、部屋を出ようとした。
でも、綾に腕を掴まれた。

「どうして逃げるの？あぁ、ご飯食べた？」
綾は碧の腕の引っ張りリビングに行った。
碧は綾の手を振り払った。
綾は、気にすることなくキッチンに向かった。
キッチンには、カレーの鍋があった。

「あ、カレー作ったんだね。今日はつき合いで食べてきたんだよ。
食べてこないと良かったな・・・・」
碧はソファの上で丸くなっていた。
綾の言葉など耳に入ってなどいなかった。

綾は、静かに碧に近づき、碧の前にしゃがみこんだ。

静かに綾の手が碧の頬にふれた。
碧の身体がビクッと震える。
綾の手は、頬から唇にそっと動いた。
碧の唇のラインをなぞった。
その手は、唇から首に移り、綾の唇が碧の唇と重なった。
綾の舌が、碧の口に入る。綾は舌を絡ませ出した。
碧の顔が赤くなった頃、綾はキスをやめた。
　綾の手は、碧の服へと伸び優しく脱がせ始めた。
碧の手がやっと動き、綾の手にふれた。
「どうした？自分で脱ぐのか？」
綾は碧の手を舐めた。
「ヤダ・・もうやりたくない・・・」
消えてしまいそうな声だった。

その瞬間
綾は、碧を押し倒した。さっきまで優しかったのとは裏腹に乱暴に服を脱がせ、ブラとパンティーだけになった。
碧は、泣き喚いていた。でもまるでその声は綾には聞こえていないかのようだった。
ブラをずらし、乱暴に舐めた。乳首が一気に反応した。
「ほら、カラダは素直だよ。こんな風になる」

綾は耳元で囁き、耳を噛んだ。
舐めながら、手はパンティに移った。
ラインをなぞっているとき、碧から声がもれた。
綾は優しい顔で笑った。

パンティーは、すでに湿っていたが、綾の右手は胸を弄り、左手は、パンティーの上にあった。碧のあそこに綾の指が一本入った。

碧の喘ぎ声が部屋に響いた。

時刻は午後１１時
意識のない裸の碧を綾は優しく抱き上げベットに寝かせた。

太陽

「おい、さっきから呼んでんだろ。おい、桂城碧」
図書室で、こんな大声を出して良いのだろうか？という大声と同時に、
黒崎裕真が碧の肩を叩いた。
碧は驚いた様子で、本を置きながら振り返った。
「たく、何でこんなところにいんだよ。今日おまえ日直だろうが」
裕真は日誌を本の上に置き、碧の隣に座った。
「なんだよ、言うことあんだろうが」
言い方はきついが声のトーンは優しかった。
「・・・・ありがとう」
「おぉ」
裕真は嬉しそうにわらった。
碧は下に置いていた鞄から筆入れを取り出し日誌を書き出した。裕真はじっと書くのを待っていた。
「なんで、隣に座ってるの？」
碧が書きながら訊いてきた
「ん？なんとなくかなぁ、生徒会とかめんどいしさぁ」
黒崎裕真は生徒会副会長をしていた。
仕事はきちんとしているらしい・・・・・のだが
碧は書き終わると立ち上がった。

「あぁ、俺が出してきてやるよ。本読んでんだろ？」
碧は座りながら、ペンをしまった。
「なぁ、今日何時くらいに帰んの？
一緒に帰んないか？」
碧は裕真の顔を見た。
「いいだろ？あ、いつも下校時刻までいるよな？待ってるよ」
「待ってなくていいよ。なんで裕真と一緒に帰らないといけないの？」
碧は、また本を開いて読み始めた。
裕真はしばらく何も言わなかったが、何かを決意したかのように、
「俺が碧と一緒に帰りたいからだ。お前この頃元気ないっていうかさぁ、なんかおかしいから。気になってな」
碧は、本を閉じ裕真を見た。
「・・・・・・」
裕真は困った顔をして頭をかいた。
「黙んなよ。照れんだろ」
碧は席を立ち上がった。
「おい、・・・・」
裕真が声をかけたが、碧は止まらず、本棚の奥に行ってしまった。
「どうしたんだよ、嫌ならイヤで・・・」

裕真が後を追うと、碧が本をもう一冊手に持っていた。

「もう、今日はもう帰る・・・から、これ借りてく・・・・・」

碧がさっき読んでいた本の続きだった。

「なんだよ、それならそうと・・・」

ため息混じりで言いながら、

「ああ ゛、日誌置いてくっからちょっと待ってろ」

慌てて図書室から走り出していった。

光の中

桂城碧とは、小学校の頃からの幼なじみだ。
昔から、危なっかしくてほっとけない奴だった。
只でさえ、友達が少ないようだし・・・・

支えてやりたいと思っていた。
こういうのを『好き』という感情だと気づいたのは最近になってからだった。

この頃、碧の様子がおかしかった。
いつも、暗い顔をしている。
前から、本好きだが放課後や昼休みなど図書室にこもるようになった。

「おい、碧聞いてんのかよ?」

学校の校門で、大声が響いた。
碧は校門の大きな木の下にいた。

「なんで、図書室で待ってないんだよ・・・
帰ったのかと思ったぜ」

息を切らしながら裕真は碧に近づいていった。
「・・・・・・」
碧は何も言わずに歩き出した。
「おいおい、ちょっと待てよ」

裕真は碧の鞄を引っ張った。
「・・・・・さわらないで・・」
裕真が碧の顔を見たが、碧は下を向いており
どんな表情をしているのか分からなかった。

「わりぃ・・・よし。帰るぞ」
裕真はまた大声を出し、碧の手をつかんだ。
「ちょ・・・と・・・」
周りの生徒はガヤガヤしていた。

「なんで、手を離してくれないの？」
学校を出てしばらくしたあたりでも、裕真は碧の手を離さなかった。
「まぁいいだろう？昔よくつないでたし」
裕真はふざけながら言った。
「・・・・・・・」
碧は鞄から少し大きめな飴玉を出して口に入れた。
裕真は少し驚いた顔をして
「なんだよ、まだ食ってんのかよ、それ」

その飴を小さい時から碧は食べていたようだ。

「うん？食べる？」
裕真に可愛らしい包みの飴玉を差し出した。
「おぉ」
裕真は少し嬉しそうに飴玉を口に入れた。
飴玉はとても甘くイチゴ味だった。

「なぁ、碧。お前どうしたんだ。綾さんと上手くいってないのか？」
裕真は空を見ながら言った。

空はまだ明るかった。烏が数羽飛んでいた。
「なんでそんな事聞くの？」
碧は道に捨ててあるタバコを見ながら・・・・・
下を見ながら答えた。
「・・・学校じゃイジメとかされてないだろう？
お前、習い物とかもしてなかったし、だから、残るは家しかないだろ」
裕真は碧を見たが、碧は顔を下げたままだった。
「怖いな・・・・裕真は私を監視でもしてるの？」
碧の口調は少しふざけてはいたが、声は震えていた。
「違げぇよ・・・おっおい、どうした」
碧は下を向いて泣きだした。

「落ち着いたか？ココア好きだろ？」
公園のベンチに碧は座っていた。
裕真がココアの缶を碧の頬に付けた。
「ごめ・・・ん・・・」
碧の目は腫れていた。
そのくらい泣いたのだろう・・・・
「なぁ、今日は家こないか？か、母さんも久しぶりに会いたがってるしさぁ・・・・」
裕真は碧の隣に座って、コーヒーの缶を開けた。

「・・・・・もう帰るよ・・・・・ありがと」
碧が立とうとした。
「おい、一人で抱え込むなよ。俺を頼ってくれよ・・・」
裕真は碧の腕をつかんでいた。
「何があったんだよ。なんで泣くようなことあんのに黙ってんだよ」
碧は、裕真の手を振り払ってまた、ベンチに腰をかけた。

「裕真には関係ないよ・・・・」
碧は制服のポケットに手を入れた。
「俺はお前を守ってやりたいんだ・・・・・
ほっとけないというか・・・・・
これは自分のエゴなのかもしれない・・・・・
でも、お前の力になってやりたいと思う
本気なんだ」

碧は空を見上げた。
もう、辺りは薄暗かった。

月夜

「久しぶりねぇ、碧ちゃんが家に泊まりに来てくれるなんてねぇ」
紀子さんは、嬉しそうに料理を作っていた。
忙しそうに、テーブルに料理を並べる。

「あの・・・お構いなく・・」
碧は少しうつむいて言った。
「なぁにいってんのよ!!今日はごちそうたくさん作るんだからぁ」

「おい、母さん鍋、鍋」
「あぁ、ちょっと裕真止めて」
裕真は急いで火を止めた。
「何やってんだよ、たくよぉ」
「そんなに言わないでよ、母さんだって碧ちゃんが来てくれて嬉しいの」
紀子さんはワシワシと裕真の頭を撫でた。

「碧、何か飲むか?オレンジジュースとかあるよ。
あぁ、母さんが昨日ケーキ作ったんだけど食うか?」
裕真が隣に座った。
「いいよ・・何も要らない」
裕真は碧の頭を強く撫でながら
「遠慮すんなよなぁ」
裕真が笑った。太陽のような男の子。
いつも周りには人がいて、みんなが回りに集まってくる。
みんなが彼を必要とする。
太陽を必要とするみたいに・・・

「よぁし、出来たわよぉ！尚彦さんは、まだだけど先に食べちゃいましょう！」
紀子さんの声が響いた。
テーブルにはたくさんの料理が並んだ。
「碧ちゃん、遠慮なんかいらないのよ。」
紀子さんは微笑んで料理を素早く盛りつけ碧に渡した。

「美味しかっただろ？母さんの料理は」
裕真はイチゴの入った器とミルクをテーブルに置いた。

「お風呂改築したんだね・・・」
「あぁ、４年くらい前にな」
碧は、紀子さんの服のを着ていた。
「風呂上がりはイチゴかアイスだよな」
裕真は、嬉しそうにイチゴをより分けた。
「・・・・・・そっか」
碧はイチゴを口に入れた。
「大丈夫か？」
裕真の口調が少し静かになった。
「・・・・・・」
「今日楽しかったか？」
裕真は、イチゴを一つ口に入れた。
「うん、昔に戻ったみたいだった・・・」
静かな口調だった。

外には、綺麗な月が出ていた。
碧は、月のような少女だった。

一人離れ、孤独な存在。
でも、とても美しく人を引きつける。
でも、誰かを受け入れることはない・・・・・
きっとない・・・・

風ふく

「ねぇ、碧ちゃん。今日はおばさんと寝よっか」
紀子さんは、布団を持ってきた。
「あ、ありがとうございます・・・」
畳の部屋に紀子さんが、布団を二つ敷いてた。

「あの・・・・ゴメンなさい」
碧は、布団の上に座った。
「まぁまぁ、なんで謝るの？碧ちゃんが来てくれておばさん嬉しいわぁ」
おばさんはニコニコ笑った。

「碧、もう寝るのかぁ」
裕真が風呂から上がりジャージ姿で入ってきた。
「裕真だめよ。碧ちゃんは私と寝るんだからね」
紀子さんは、笑って言った。
「分かってるよ・・・って、違うぞ変なこと考えてないからな！」
裕真は慌てて、言った。
紀子さんは
「可愛い息子に育ってくれて良かったわぁ」
のんきそうに言った。
碧も笑っていた・・・だが、
その笑顔も一瞬にして曇った。

玄関のチャイムが鳴ったその瞬間に・・・・

かげり

「こんばんは、遅くに申し訳ありません。」
時刻は午後１０時をまわっていた。
紀子さんが、玄関を開けるとそこには、若い男が立っていた。
「あなた・・・確か綾さんよね？」

黒髪に、知的な眼。整った顔。高い背丈。
「はい、そうです。あの、お尋ねしたいことがありまして・・・
こちらに桂城碧は来ていませんか？」

「はい、来ていますが。」
紀子さんは、戸惑った顔をして
「今日は、碧ちゃんここに泊まるって・・・電話いきませんでしたか？」
「え？そうだったのですか？家にいなくて心配して探してたんですよ」
綾は微笑んだ。
「あら、申し訳ありません。きっと電話するの忘れていたんでしょう」紀子さんも笑った。
２人の笑顔はとても自然だった・・・・
「分かりました。碧をよろしくお願いします。」
綾はスッと頭を下げて玄関のドアを静かに閉めた。

太陽と風

ピンポーン・・・・
玄関のチャイムが鳴った瞬間、碧の顔が曇ったのが一目で分かった。
母さんも、それに気が付いたようだ。
母さんはいつも呑気な人のように見えるが、
頭はいいし、感も鋭く結構したたかな人だ。

「裕真、母さんが出るから碧ちゃんをお願いね」
さきほどまでとは違い、少し冷たい声だった。
俺もあまり聞いたことの無い声・・・

碧の顔は血の気が引き、真っ青だった。
「碧、大丈夫だよ。」
俺は、碧を抱きしめていた。

碧をここまで、怯えさせる正体は・・・・
やはり、綾さんだった。
玄関で、母さんと綾さんが話している間
碧はずっと俺の腕の中で震えていた・・・・

俺は、今何を思っているのだろう・・・
この気持ちはいったい何なのだろう。
怒りとか、悔しさ、自分の無力さが腹立たしかった。

玄関のドアが閉まったのが分かった。
母さんが戻ってきた。

「もう、帰っちゃったわよ。こらこら、裕真。

そんなに強くしちゃダメよ。碧ちゃんがつぶれちゃうじゃない」
母さんの口調はいつも通りに戻っていた。
俺はパッと腕を離した。
碧は、小さな身体をさらに小さくして泣いていた。
「碧、大丈夫だよ。ほら、もう帰ったから」
俺は、碧の頭を優しく撫でた。
俺は、こんな事しかできない・・・・
もっと力がほしい。碧を守れるだけの力がほしかった・・・

「裕真、コーヒー入れてきて！
あ、碧ちゃんはココアのほうが良いかしら？」
母さんは、ニコニコしながら碧の顔をのぞき込んだ。
碧は首を振るだけで、何も言葉を発しなかった。

俺は、コーヒー二つとココアをつくった。
ため息しか出ない・・・・
何が守ってやるなんだ。何が大丈夫なんだ。
結局、碧が泣いている。俺の腕の中で・・・・

部屋に戻ると、碧は泣きやんでいた。
母さんが碧の背中を撫ででいた。
「あぁ～、ココアが来たよ。」
母さんがこっちを見て笑った。
碧もこっちを見て・・・力なく笑った。

闇

「母さん、碧大丈夫か？」
「平気よ。もう寝ちゃったわ」
母さんは手にマグカップを２つ持っていた。

「なぁ、母さん。俺は、碧に守ってやるって言ったんだ。でも守ってやれなかった・・・・・」
手に持っていたコーヒーは、もうとっくに冷めていた。

「裕真は、私と尚彦さんの子供なのよ。大丈夫よ。裕真、絶対に碧ちゃんを守るのよ」
母さんは、少し寂しそうな顔をした。

「あぁ・・・・・・父さん今日帰ってくるって言ってなかったか？」

「そうねぇ・・・・・」

人は、必ず大きな何かを背負って生きている。
他人には、大したことじゃない、些細なことで人生が狂うことがある。

外は、闇が広がっていた。太陽がいない時間。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8655k/

籠の中の月

2010年10月9日23時12分発行